科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　２６　年　　６　月　１０　日現在

機関番号：　１３６０１
研究種目：　基盤研究(C)
研究期間：　2010～2013
課題番号：　２２５２００４４

研究課題名（和文）清朝中期以降の寧波における文化保存の精神史

研究課題名（英文）The history of ideas of the culture preservation in Ningbo after the middle of Qing dynasty

研究代表者
早坂　俊廣（HAYASAKA, Toshihiro）

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０２５９９６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円、（間接経費）　　690,000円

研究成果の概要（和文）：中国浙江省寧波市はもとより、浙江省杭州市・紹興市、江蘇省揚州市・泰州市・南京市等を精力的に調査し、それぞれの地域に於ける文化保存の現況を確認するとともに、全祖望ら中国近世の思想家たちがそれぞれの場所とどのように関わり合っていたかを、文献資料との照らし合わせを通して検討した。その結果、寧波を中心とする、文化保存や思想継承に関わる認識を通時的に解明することができたとともに、全祖望に関わる、「記憶と記録」の問題、「鈔書」などの文化的営為にこめられた意識、あるいは、楊簡思想をめぐる認識の変遷などを具体的に論証することができた。

研究成果の概要（英文）：I went to Ningbo,Hangzhou,Shaoxing(Zhejiang), Yangzhou,Taizhou,Nangjing(jiangsu),and investigated energetically the actual situations of the culture preservation in those areas. By combining those field works and literature reading comprehension, I clarified the genealogy of recognition for the culture preservation. Especially I worked on the theme that how the intellectual elite like Quanzuwang was connected with place and performed intellectual activities in Chinese early-modern society. As a result, I was able to prove the diachrony of the recognition about culture preservation in Ningbo area. And I elucidated the problem how Quanzuwang loved his hometown and recorded about there, how Quanzuwang took recognition of copying various precious books by himself, and how the thought of Yangjian was made reference at Cihu area,etc.

研究分野：　中国哲学

科研費の分科・細目：　哲学・中国哲学

キーワード：　全祖望　寧波　浙東学術　文化保存　記憶と記録

１．研究開始当初の背景

研究開始当初は、５年間続いた特定領域科研「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創成」（代表：小島毅）における計画研究「寧波における知の営みとその伝統―学脈・宗族・トポフィリア―」（代表：早坂俊廣）が終了した直後であった。東アジア海域の文化交流を総合的に検討する特定領域科研にあって、「寧波」に焦点をあわせて考察する同計画研究は、充実した共同研究によってかなりの成果を得られた。そのなかでも特に全祖望の重要性が痛感されたので、より長い視野に立って彼を掘り下げて研究したいとの思いから、本研究を開始した。

例えば、前科研で、寧波地域の書院に関する全祖望の記録に関し、現地調査で地理的配置を確認しつつ、その現代日本語訳を共同で作成した。その際、全祖望がどういう意識からこのような書院記を記したのか、全祖望以降にそれらの書院がどういう運命をたどったのか、あるいは、全祖望の書院記がどのように歴史に根付いていったのか、という問題を、継続して検討し、より深化させていきたい、と考えた。

これはあくまで一例に過ぎないが、要するに、前科研の成果を、特に「文化保存というエートス」「記憶と記録」という問題に集約し、時間的にはより長いスパンで掘り下げる研究をしたいと考えた次第である。これは、上記の特定領域研究で共同研究するうちに、また、全祖望の資料を読むにつけ、このような問題の問題性を痛感していたからである。さらに、上記の計画研究では「現地調査」ということを重視した手法を採ったが、本計画研究でもそれを継承したいと考えた。「文化保存というエートス」「記憶と記録」という問題系の重要性を気づかせてくれたのが、前科研の現地調査の際に出会った現地研究者の姿や現地の風土－彼らやそれらが今でも体現しているエートスだったからである。

２．研究の目的

清朝中期以降の寧波、端的に言えば「ポスト全祖望の時代の寧波」において、文化伝統（特に地域に根ざしたそれ）はいかに保存・継承されていったのかを検証する。そのような検証を通じて、〔ｉ〕「文化保存の精神史」とでも言うべき、中国思想史の一脈を摘出する、〔ii〕「明末清初」と「清末民国初」を思想史的に架橋する視点を寧波地域に即して獲得し、近代における、「国学」「新儒家」といった伝統文化の改変・創造といった全国的な動きとの連続性の有無を確認する、〔iii〕「記憶／記録」に関する比較思想文化学的探求の端緒とする、ことを目指す。

３．研究の方法

上でも述べたように、「現地調査」に強く留意しつつ、文献資料の精査およびその成果と「現地調査」の成果とのつきあわせを重視した。「現地」という点で言えば、「中国における、中国語での研究成果の発信」にも気を配った。

以上の点をより詳細に述べてみたい。中国の伝統学術の形成に大きな貢献を果たした「書院」や「蔵書楼」は、現代に残っているものは数少ない。だが、それらがかつてあった地点を確認し、その地点がその町のどういう場所にあったのか、どういった交通路を使用してその地点に皆が移動したのか、等といった観点から周囲の地理環境を観察することは、それらの文化施設が有していた場所的重みを看得するうえで極めて重要である。このような点に留意しつつ、現地調査を行った。

また、エートスが形成される「場所」にも、本研究は留意している。「場所」は地理的空間を指すばかりではなく、人的結合が生み出す文化の気風や、思想概念が形成していく間主観的観念領域もまたそこに含まれる。現地調査のみならず、文献渉猟や現地の方々との学術交流を通して、そういう「思想の場」を実地に確認し意識化して、分析の対象に据えることも目指される。

文献資料についても、異文化・異時代の思考・精神を了解するためにその精読が不可欠であることは言うまでもない。その場合、「何が書かれているか」だけではなく、「なぜ、そのような書き方になったのか」を検討する必要がある。文献資料の精読、およびその成果と現地調査とのつき合わせを強調するのは、このような一歩引いた視点を獲得したいがためである。また、現在、活字印刷されたものやインターネットで公開されているものが容易に入手できる社会状況であるが、そういう時代であるからこそ、活字になる前の文字状況、記載様式を確認することが重要になっており、そのためにも、現地を訪れることが必要なのである。

さらに言えば、現地の人々との交流を通して、現地の「文化風土」を実感させられることが多々ある。その機会を得るためにも、「中国における、中国語での研究成果の発信」を意欲的に行うことにした。

４．研究成果

（１）現地調査

まず、2010 年 8 月 24 日から 9 月 2 日にかけて、中国浙江省杭州市と江蘇省揚州市・南京市等で現地調査を行い、全祖望および彼が生きた時代・土地に関する文化地理学的知見の獲得に努めた。具体的には、揚州市において、全祖望のパトロンでその葬儀にも深く関

わった揚州馬氏の叢書楼に関する現地調査を行うとともに、馬氏に代表される塩商の文化活動に対する認識を深めた。また、江南地方の文化の中心である杭州市・南京市に関して、文化遺跡の保存状況について調査を行うとともに、当時の主たる交通手段である京杭運河に関する知見も獲得した。

また、2011 年４月から 2012 年３月まで、勤務校よりサバティカル研修を認められたため、杭州市にある浙江大学に拠点を構え、現地ならではの研究を行うことができた。具体的には浙江省寧波市・杭州市・紹興市等で実地調査を行い、全祖望および彼の友人に関わる歴史遺跡を実見するとともに、地理的な場所環境を確認した(廬氏抱経楼、徐氏煙嶼楼、趙氏小山堂、蕺山書院、等といった文化地点・遺址)。また、浙江大学図書館・浙江図書館等で全祖望や王梓材・馮雲濠に関わる資料(『宋元学案』、『水経注』等)を調査・収集するとともに、多くの現地研究者たちと研究情報の交換を行うことができた。

2013 年は、本科研での現地調査を行わなかったが、中国を７日間訪問して調査を行った際に、上記の現地研究者たちが同行してくれたので、研究情報の交換を積極的に行った。さらに、上海で行われた国際シンポジウムに参加した際に、資料収集と研究情報交換を行った。

（２）中国に於ける研究成果の発信

上で述べたように、1 年近く中国に滞在する機会が 2011 年度にあった。下に記す［学会発表］②③はその際に行われたものであるが、それ以外にも、様々な機会で研究成果の発信を行った。例えば、2011 年 5 月 20 日に杭州師範大学で開かれた『“国学在当代中国”学術座談会」では、杭州師範大学に新設された「国学院」に関して、パネリストとして提言を行った。また、同年 10 月 17 日に泰州市鼓楼路国泰大酒店で開催された「泰州学派紀念館布展大綱研討会」に於いても、改修予定の記念館に対する提言をパネリストとして行った。いわゆる「学会」ではないため、下のリストにはあげていないが、「文化保存の精神史」という本科研の研究成果が、中国の現場でも意義を持つことを実感した。さらに、これも「学会」でないためリストアップしなかったが、2012 年 3 月 13 日に中国計量学院で、同 15 日に杭州師範大学国学院で、「当代日本中国学研究的方法与动向」という講演を行った。これらは、中国の学生や教員に対して中国語で行った講演であり、このような交流を通して、伝統学術や地域文化に関する生の声に触れることができた。さらに言えば、［学会発表］①の報告は、次のテーマへのステップアップという意味をも帯びている。

（３）図書・論文

［図書］①については、全体の編集に責任をもって当たったが、ここでは、この中に収められた、当人が個人で執筆した個別の文章について説明したい。「思想の記録／記録の思想－寧波の名族・万氏について」（第Ⅱ部第 3 章、pp.162-177）は、寧波の万氏一族について長いスパンで解説したものであるが、「白雲荘」という彼らの別荘兼書院についてかなり詳しく紹介した。「「中国のルソー」を育んだもの」（pp.120-123）では、「二老閣」「五桂楼」といった蔵書楼の役割に力点を置いて解説した。同じく「寧波の英雄・張煌言」（pp.266-271）では、張煌言の故居・墓に関する現地調査を踏まえつつ、彼をめぐる言説をめぐって叙述を行った。張煌言に関しては、全祖望の残した文章が非常に有益であり、それを紹介しつつ記述を行った。

［図書］②所収の「慈湖の楊簡論」という論文は、寧波府慈渓県の「慈湖」に於ける、そして「慈湖」をめぐる「楊簡」論の諸相を扱ったものである。楊簡は南宋の同地出身の学者であるが、彼の「不起意」説は、後の時代に大きな波紋を呼んだ。本稿は、その彼の思想を地元・慈渓でどのように語られたのかを検討したものであるが、その過程で、王梓材・馮雲濠の活動について紹介した。

［雑誌論文］①②は、どちらもその論文名が内容をよく語っている。①は「鈔書」という行為に全祖望がどのように関わったのかを論述することで、②は寧波の「文化地点」にまつわる記憶を全祖望がどのように記録したのかを論述することで、寧波地域を貫く「文化保存の精神史」というものを摘出したものであった。全祖望は「鈔書」を積極的に主体的に行ったが、その際に「鈔」された書物のほとんどが郷土寧波と関係の深いものであった。また、寧波の「文化地点」に関する全祖望の記録も、「記録」という言葉が予想させる客観性・没個性といった性質とは大きくかけ離れた、濃厚な場所の記憶を存分に盛り込んだ、場所愛に充ちた作品であった。これら［雑誌論文］①②は、「慈湖」における「楊簡」論を紹介した論文とともに、本科研の成果を最もよく体現したものである。なぜならば、どの成果も、現地調査で得た地域の地理的文化的配置を踏まえつつ、文献を長いスパンで渉猟して整理し、蔵書楼や書院のみならず、文化空間として「慈湖」や英雄墓を取り上げ、そこに脈々と流れる文化保存の精神史を摘出したものだからである。

如上の研究成果により、寧波を中心とする江浙地域に於ける「文化保存の精神史」を摘出することができたとともに、「記憶／記録」に関する比較思想文化学的探求の端緒を構築することができた。「研究目的」で掲げた目的のうち「〔ii〕「明末清初」と「清末民国初」を思想史的に架橋する視点を寧波地域に

即して獲得し、近代における、「国学」「新儒家」といった伝統文化の改変・創造といった全国的な動きとの連続性の有無を確認する」に関しては、やや成果に乏しくなってしまった反省はあるが、「（２）中国に於ける研究成果の発信」で述べたような、杭州師範大学「国学院」における活動を行うことができたので、全般的には、当初の目的をほぼ達成し得たと信ずる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①早坂俊廣,「全祖望と鈔書の精神史」,『信州大学人文学部　人文科学論集〈人間情報学科編〉』第 47 号, pp.1-15, 2013, 査読有
②早坂俊廣,「場所の記憶／全祖望の記録」,『中国―社会と文化』第 27 号, pp.196―211, 2012, 査読有
③早坂俊廣（申緒璐訳),「全祖望与钞书的精神史」,『儒学天地』2012 年第 1 期, pp.39―43, 2012, 査読有

〔学会発表〕（計４件）
①早坂俊廣,「羞耻的伦理学」,“跨文化视域之儒家伦理研究”国际学术研讨会, 2013.12.22, 上海市・復旦大学哲学学院
②早坂俊廣, 復旦大学哲学学院主催学術講演会,「全祖望与鈔書的精神史」, 2011.12.9, 復旦大学光華西主楼
③早坂俊廣, 浙江大学人文学部浙江歴史文化研究青年団体・浙江省文化芸術研究院主催学術講演会,「全祖望与場所的記憶」, 2011.5.30, 杭州市・浙江大学人文学院咖啡館
④早坂俊廣, 日本中国学会第六十二回大会,「全祖望と鈔書の精神史」, 2010.10.10, 広島大学文学部

〔図書〕（計２件）
①小島毅監修・早坂俊廣編, 東京大学出版会,『文化都市　寧波』, 2013,【編集】総 282 頁。【執筆】pp.1-18（共著）, pp.120-123 , pp.162-177, pp.266-271, pp.279-282（以上, 単著）
②吉田公平教授退休記念論集刊行会編, 荒木龍太郎・市來津由彦・小路口聡・早坂俊廣他著, 研文出版,『哲学資源としての中国思想』, 2013, 総 455 頁。pp.184-205（翻訳）, pp.206-229（単著）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/arts/prof/hayasaka_1/blog.html

６．研究組織
(1)研究代表者
早坂　俊廣（HAYASAKA, Toshihiro）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：10259963

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
何　俊（HE, Jun）
杭州師範大学・国学院・院長
研究者番号：無し

申　緒璐（SHEN, Xulu）
杭州師範大学・国学院・講師
研究者番号：無し

銭　明（QIAN, Ming）
浙江省社会科学院・研究員
研究者番号：無し

方　祖猷（FANG, Zuyou）
寧波大学・元教授
研究者番号：無し